

第 6 回 Japan Blackboard User Group 会合（JBUG6）参加報告

教育研究技術支援センター 鈴木 徹

日 時：平成 28 年 5 月 28 日

場 所：玉川大学（東京都）

【大会概要】

Blackboard の日本一次代理店アシスト・マイクロ社が事務局となっている Blackboard のユーザー会合である。

参加者は主催者発表で 21 名（主催関係者除く。）

高専からは函館高専 1 名、宇部高専 2 名。



【第 1 部 テクニカルワークショップ】

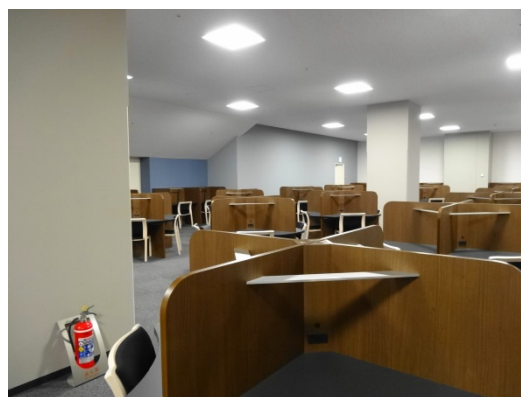
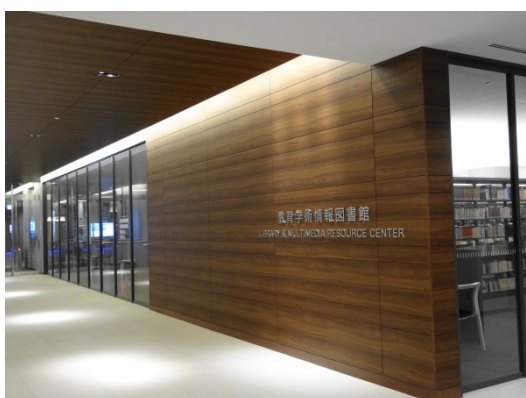
JBUG では毎回 1 講演、技術寄りの講演を実施しているようで、今回は SIS（Student Information System）と言う日本では「教務システム」または「学務システム」などと呼ばれる学生管理、履修管理、成績管理などを行う教務系の処理システムと Bb Learn との連携をするためのモジュールに関する、Bb のシステム管理業務従事者向けのワークショップであった。参加者は当方を含め 11 名。

高専の場合、これらの処理はどかが担っているのか分からなかったが、恐らく Bb の幹事校または機構本部がやっているのだろうと思われた。内容は Bb のシステム管理者権限にての作業として説明されたため、内容は概略理解できたが、今のところ利用高専側で実際に操作することはないと思われる。

【玉川大学ラーニングコモンズ見学】

構想、着工計画にそれぞれ40年、7年をかけて2014年に竣工したという玉川大学が誇る、図書館とICT活用による自学自習をサポートする施設が一体となった玉川大学ラーニングコモンズの施設見学会。

予算と歳月をふんだんに投資し、理想とする施設を実現したということのよう。学生にも概ね好評と言うことだった。



【情報交換会の要点】

(1) 「玉川大学 Blackbaord コミュニティ活用について」

国内の大学で最も Bb の活用が進んでいる玉川大学において、教育学部教育学修支援課という事務部門の女性事務職員による Bb のコミュニティ機能を使った活用事例紹介。

事務部門から不特定学生への諸連絡、特定の学生（留学生、委員会、TA、SA など）などのためのコミュニティ、教職員のための連絡・コミュニティ（委員会とか）などへの Bb 活用の事例紹介。

活用推進のための1つのポイントは、Bb でしか連絡しない、コミュニケーションは Bb で、というような学校全体としての Bb への誘導。

(2) 「Bb による予習動画の提示と英語の反転授業」

帝京大学で学生の英語スキルを伸ばすことに苦勞されておられた教員が Bb による動画提供などを通じて予習を促し、反転授業することで学生の英語学習へ取り組む時間を延ばさせレベルの向上に繋げることができたという事例報告。

内容に関する質疑応答はなく、むしろこの発表内で、教員が Bb 上にアップロードした教材が教科書の複製である、との説明から、著作権違反に該当するのではないか？との疑義問題となり、著作権に違反する、この程度なら違反しない、で少々紛糾。発表者には著作権に関する意識が全くなかったということで、やはりこうした LMS 活用における著作権の問題は重要と認識した。

(3) 「初年度コンピュータ科目での Blackboard 利用」

日本大学では第一学年が 1 クラス平均約 100 名以上で 18 クラスあり、学部 ICT 環境の利用方法や情報セキュリティと著作権の理解などの学習を実際の開校授業で 18 回もできないため Bb 上で開講したら学生が割合よく使ってくれた、と言う事例紹介。

(4) Blackboard adoption and application in the ELF program

玉川大学における Bb の活用事例集紹介だが、英語によるプレゼンテーションで、かつ、2 名の外国人による発表。最初の演者はゆっくり分かりやすい英語で話してくれていたが、二人目になって途端に難しくなり、以降、理解不能。

(5) 「全国国立高専共通 LMS としての Bb 利用と学習到達度評価 CBT」

函館高専小山先生による、国立高専機構が Bb を導入するに至った経緯紹介と、今後実施予定の Bb を使った学習到達度評価 CBT の紹介。

【WS の要点】

「Blackboard Learn ルーブリックの使い方」

Bb におけるルーブリック評価の具体的操作法のハンズオンセミナー。

注目機能を実際に体験できたのは良かったが、講演者側の段取りが悪く、ハンズオン部分がうまくいかずに時間ばかり浪費した結果として体験に使えた時間が短く、最後の方は終了時間との兼ね合いで駆け足の口頭説明になり、中途半端に終わった印象。

【総括】

- 会合自体はまだまだ発展途上のようで、参加者が非常に少ないし質疑応答や情報交換が活発とは到底言えない。今大会の初参加者は 6 名。
- Bb を導入している大学では Bb のシステム管理業務が発生し、そのための人員、労力、スキルが必要であり、担当者は苦勞されておられるようであった。その点、高専の場

合、その辺りは余り心配ないようなので、この点では助かっている部分があると感じた。

- **LMS** の活用に成功しておられる大学担当者の話を聞くと、**LMS** をこういう風に使って欲しい、こういう風に役立てて欲しい、という当初からの目論見、あるべき姿の設定があった、とおっしゃっておられた。**Bb** をうまく使いこなせば学校内の様々な業務に活用できるが、そのためには **LMS** を使って、“学校として何を指すのか”、“どういう風に使って欲しいのか”、の明確化が必要であると感じた。つまり、**LMS** は教育の道具である。道具を使って何を実現するか、が大事だと感じた。